第１回《白醉庵・吉村観阿と奈良》
日時：５月 17 日（月）10:30～12:00　講師：宮武慶之　梅花女子大学非常勤講師

優れた点を瞬時に判断する目利き。特に茶の湯では道具の目利きが重要とされてきました。江戸時代後期の江戸で目利きとして活躍した吉村観阿もその一人です。観阿の先祖が奈良の出身であった点を中心に、観阿の生涯と道具の目利きについてご紹介します。

第２回《川端康成、上方の人 ―志賀直哉、谷崎潤一郎、川端康成にみる表現―》
日時：６月 21 日（月）10:30～12:00　講師：呉谷充利　建築史家・相愛大学名誉教授

川端康成は、志賀直哉の「雨蛙」について「矢張り志賀直哉氏は、志賀氏一人の世界を持っていた。（大正 13 年１月）」と書いています。川端康成の経歴を辿れば、大阪在住は多感な十八歳までつづいています。東京に出るまで、かれが青年期の大半を過ごす茨木は京都と大阪のほぼ中間に位置します。暗にみれば、谷崎潤一郎が心中に期した「これだけの大都市（大阪）」（「私の見た大阪及び大阪人」）におけるその作家の一人として、川端康成その人を考えてみることができるのかもしれません。川端康成の文学的な素養は淵源たる上方のその地に培われ、その文学はまさしく上方の精神世界に立っています。志賀直哉、谷崎潤一郎と川端康成の作品を読み比べながら、その表現を辿ってみます。

第３回《泉鏡花の戯曲『天守物語』を読む》
日時：７月 19 日（月）10:30～12:00　講師：西尾元伸　帝塚山大学准教授

泉鏡花『天守物語』（大正 6）は、「播州姫路。白鷺城の天守、第五重」を舞台とした戯曲作品です。本作での、白鷺城の天守五層は人の立ち入らない異界であり、天守夫人・富姫が住まう場所です。そこに、姫川図書之助なる若い鷹匠がやってくることで、ストーリーが展開していきます。泉鏡花は、一般に幻想文学の作家と言われますが、その幻想性は小説をはじめ、戯曲、随筆と多岐にわたる創作において発揮されました。『天守物語』は、そうした鏡花戯曲のなかで代表作のひとつと言えます。本講座では、『天守物語』が戯曲という表現形態で書かれていることに留意しつつ、その作品世界を楽しみながら読解してみたいと思います。

第４回《亡き兵士に捧げるイメージ》
日時：８月 16 日（月）14:00～15:30（★午後）　講師：平瀬礼太　美術史家・愛知県美術館

日本の近代において、兵士たちは死と背中合わせに、その恐怖と闘ってきた。そして家族や近親者は、彼らを突如失う可能性を脳裏に描きながら、帰りを待ち続けた。帰らぬ兵士の存在を埋め合わせるものなど、容易に見つかる訳はない。しかし、せめてもの思いとして、彼らの姿を後にとどめようとした。遺影で偲ばれるのが常であったが、時に立体的な像によりその霊を悼む例も現れていた。ここではそのような例を紹介しながら、それらに宿る追悼の思いに触れてみたい。

第５回《文学・映画に見るパンデミック――カミュの『ペスト』を中心に》
日時：９月 20 日（月）10:30～12:00　講師：東浦弘樹　関西学院大学教授

昨年来、新型コロナウイルスの感染拡大によりパンデミックを描いた文学作品や映画が注目を浴びている。本講座ではアルベール・カミュの『ペスト』を中心に、ボッカチオの『デカメロン』、ダニエル・デフォーの『疫病流行記』、エドガー・アラン・ポーの『赤死病の仮面』、カレル・チャペックの『白い病』などの文学作品、『ブレイクアウト』、『コンテイジョン』、『アンドロメダ…』などの映画、さらには『バイオハザード』、『ブレインデッド』などゾンビ映画にも言及しながら、文学・映画がどのように感染症を描いてきたかを考えたい。

第６回《近代奈良の異才　森川杜園の芸術》
日時：10 月 25 日（月）10:30～12:00　講師：松川綾子　奈良県立美術館　学芸員

森川杜園（もりかわ・とえん　1820-1894）は、幕末から明治にかけて奈良で活躍した彫工。奈良の伝統工芸の一つ・奈良人形（一刀彫）の名手として知られ、明治期には正倉院宝物をはじめとする名宝の模写・模造制作にも取り組み、国内外の博覧会で受賞を重ねるなど、日本の彫刻史に確かな足跡を残した人物である。本講座では、杜園の生誕 200 周年を記念して奈良県立美術館で開催予定の「生誕 200 周年記念　森川杜園展」（仮称）と連動し、その魅力あふれる造形世界を紹介する。

第７回《芥川龍之介「玄鶴山房」―原稿から見えてくるもの―》
日時：11 月 15 日（月）10:30～12:00　講師：吉川仁子　奈良女子大学准教授

芥川龍之介は、評論「文芸的な、余りに文芸的な」の中で志賀直哉を非常に高く評価しています。また、「「話」らしい話のない小説」を提唱し、それは「最も詩に近い小説」だと述べ、その代表として志賀の「焚火」を挙げました。晩年の芥川には私小説への傾斜が見られますが、彼の死の半年前に発表された「玄鶴山房」は、年老いて寝たきりになった堀越玄鶴と彼を取り巻く人々の暗鬱たる在り様を描いた、「焚火」とは全く趣の違う虚構作品です。芥川はこの作品を書き上げるのに非常に難渋しましたが、残された原稿（奈良県吉野の阪本龍門文庫蔵）を検証すると、彼の作品構築にあたっての苦闘が見えてきます。その苦闘の跡をたどってみたいと思います。

第８回《日本人の美意識》
日時：12 月 20 日（月）10:30～12:00　講師：井上克人　関西大学名誉教授

女身仏に春剥落のつづきをり　（細見綾子『伎藝天』より）かつて和辻哲郎の『古寺巡礼』や亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』、あるいは入江泰吉、土門拳の藝術写真を見て奈良、大和路を訪れる人々が多くいましたし、今もそれは変わりません。ところで日本人はそうした天平の日本文化に想いをいたし、そこに何を求め、どこに奈良の魅力を感じているのでしょうか。かつて、セイロンやミャンマー、タイなど東南アジアの仏教国からやってきた僧侶たちは、奈良や京都の寺院の古仏をみて、日本人は仏教の信仰心を失ったのではないかと嘆息したそうです。黄金色であるべき尊像を剥げるに任せて放置していると映ったようで、このままでは仏の霊力も衰えてしまっていると感じたようです。思い起こせば、中国、韓国の寺院の仏像は、どこもけばけばしいほどの原色で塗りたくり、黄金色で輝いています。しかし日本人は逆にそうした派手に彩られた仏像は却って俗っぽくて霊妙さに欠け、古仏のもつ深遠な美しさを感じ取ることはできません。このように、同じ東アジア文化圏でも、日本人は独特の感性を持ち合わせています。それはいったいどういうことなのでしょうか。それを探ってみたいと思います。

※参加ご希望の方は志賀直哉旧居までお問い合わせください。
主催：志賀直哉旧居（奈良学園セミナーハウス）

志賀直哉旧居特別講座
2021 白樺サロンの会（全８回）
－令和の時を迎えて、奈良ふたたび（続）－

古代ギリシア建築にはエンタシスという造形の仕方があります。
法隆寺中門の柱のふくらみはこの影響を受けているともいわれています。
国際的な都でありつづける奈良の地で、
洋の東西にわたる眼をもってひろく美や文化について考えてみたいと思います。
古代ギリシアの賢人、アリストテレスはものとしずかに向き合い、
これを観照することに至純の幸福があると云います。
今、新たな令和の時を迎え、志賀直哉旧居のしずかなひとときを共に過ごしたく思います。

◆受講料	各回 350 円　入館料込　（奈良学園教職員、在籍者は無料です）
◆定　員	各回 15 名（事前申込先着順）※定員になり次第、申込を締め切ります。
◆会　場	奈良学園セミナーハウス 志賀直哉旧居（奈良市高畑町 1237-2）
◆申　込	志賀直哉旧居（0742-26-6490、seminar@naragakuen.jp）にお申し込みください。
	■ご来館の皆様へ注意事項とご協力のお願い （新型コロナウイルス等感染予防・拡散防止策について） ・感染防止のために講演中もマスクの着用をお願いいたします。 ・咳エチケットをお守りいただきますようご協力お願いします。 ・検温で発熱がある方はご来館をご遠慮いただきます。 ・ご来館時の手指の消毒や場内での手洗い励行などにご協力お願いいたします。 ・館内で体調の異変を感じた場合は、講演中でもご遠慮なく事務室職員にお声がけください。 ※新型コロナウイルス等感染の拡大状況に伴い、日程変更中止等の判断をさせていただく可能性がございます。何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。
◆主　催	奈良学園セミナーハウス 志賀直哉旧居

志賀直哉旧居 HP

アクセス

奈良学園セミナーハウス志賀直哉旧居